

日本独文学会
2016年 春季 研究発表会

研究発表要旨

2016年5月28日(土)・29日(日)

第1日 午前10時より

第2日 午前10時より

会場 獨協大学

発表者・発表会場一覧

2016年 5月28日(土) 10:00~14:30				
5月28日	A会場(207教室)	B会場(206教室)	C会場(408教室)	D会場(409教室)
10:00~10:05	開会の挨拶 (A会場・207教室)			
10:05~11:30	総会			
11:40~12:10	日本独文学会賞授賞式			
12:15~13:15	ドイツ語学文学振興会賞授賞式・総会	ドイツ語教育部会総会(12:40~13:10)		

招待講演 ドイツ語教育
森 朋子
(13:20~14:20)

2016年 5月28日(土) 14:30~17:30				
5月28日	A会場(207教室)	B会場(206教室)	C会場(408教室)	D会場(409教室)
	シンポジウム I	口頭発表:文学 I	口頭発表:文学 II	口頭発表:ドイツ語教育
14:30~15:05	シンポジウムI (14:30~17:30) 意味的構造性に基づく 文法構造をめぐって Satzstruktur aufgrund der semantischen Struktur	松原文	金 志成	Sven Körber-Abe
15:10~15:45		田中一嘉	西尾 悠子	Markus Rude
15:50~16:25		今村 武	Oliver Mayer	Axel Harting
16:30~17:05		縄田 雄二	林 英敏	甲藤 史郎
17:05~17:30				

18:00~20:00 懇 親 会 (35周年記念館2階 学生食堂)

2016年 5月29日(日) 10:00~13:10				
5月29日	A会場(207教室)	B会場(206教室)	C会場(408教室)	D会場(409教室)
	シンポジウム II	口頭発表:文学III	口頭発表:文学IV/文化・社会	口頭発表:語学
10:00~10:35	シンポジウム II (10:00~13:00) Autofiktion heute	伊東 麻衣	稲葉 瑛志	大喜 祐太
10:40~11:15		清水 恒志	丸山 達也	嶋崎 啓
11:20~11:55		杉山 有紀子	森口 大地	和田 貴康
12:00~12:35			Azuka Yamazaki	高 裕輔
12:35~13:00				
13:05~13:10	閉会の挨拶(A会場・207教室)			

発表者・発表会場一覧

2016年 5月28日(土) 10:00~14:30				
5月28日	E会場(407教室)	F会場(406教室)	G会場(2階セミナースペース)	H会場(404教室)
	ブース発表	ブース発表	ポスター発表	大学ドイツ語入試展示
10:00~10:05	開会の挨拶 (A会場・207教室)			
10:05~11:30			ポスターは10時から掲示	
11:40~12:10				
12:15~13:15				

ポスター発表4件
13:00~14:30
(発表者待機)
David Fujisawa
山崎 明日香
柴田・Endres・能登
Marco Schulze

大学ドイツ語入試問題
検討委員会
展示・発表
(13:00~17:30)

ブース発表IV
(16:00~17:30)
清野・新倉 他
大学入試と外国語教育

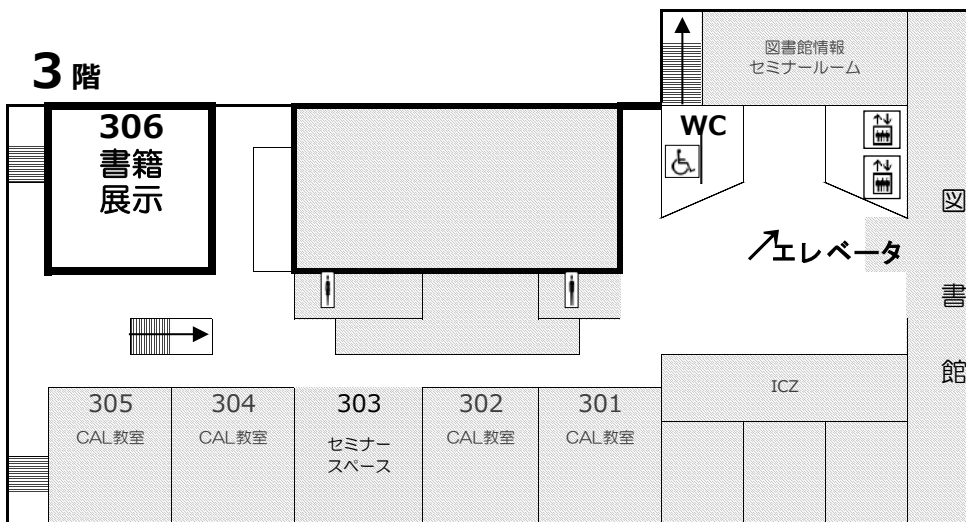
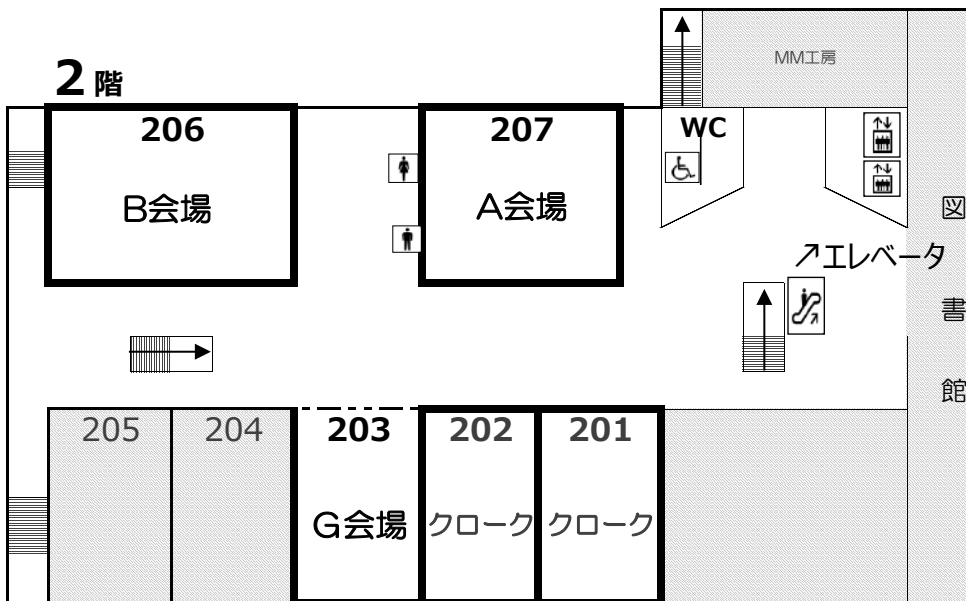
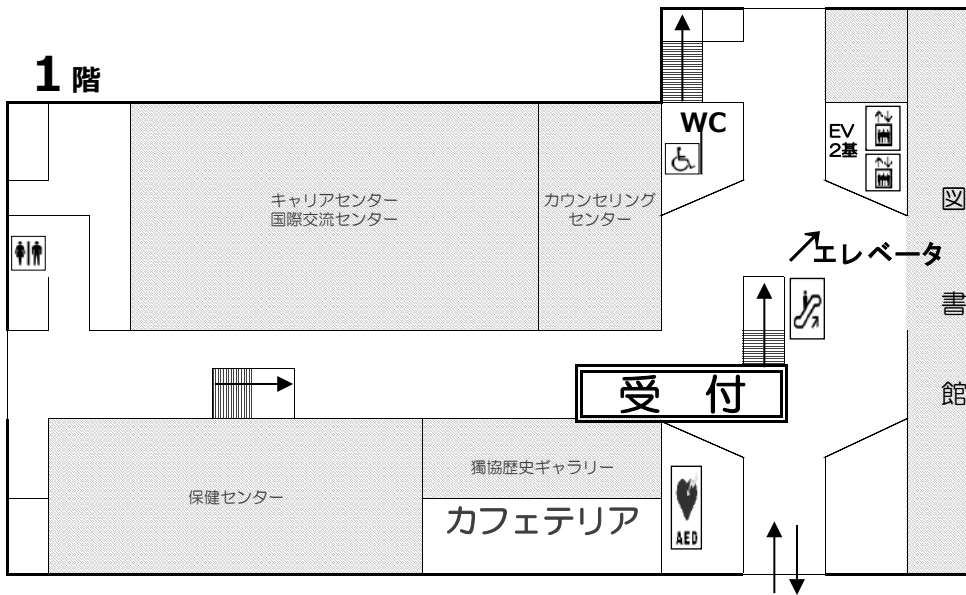
2016年 5月28日(土) 14:00~17:30			
5月28日	E会場(407教室)	F会場(406教室)	G会場(2階セミナースペース)
	ブース発表	ブース発表	ポスター発表
14:30~15:05	ブース発表I (14:00~15:30) 細谷・杉浦・阿部	ブース発表II (14:00~15:30) 小川・境・治山	ポスターは引き続き掲示
15:10~15:45			
15:50~16:25			
16:30~17:05	ブース発表III (16:00~17:30) Asuka Yamazaki		
17:05~17:30			

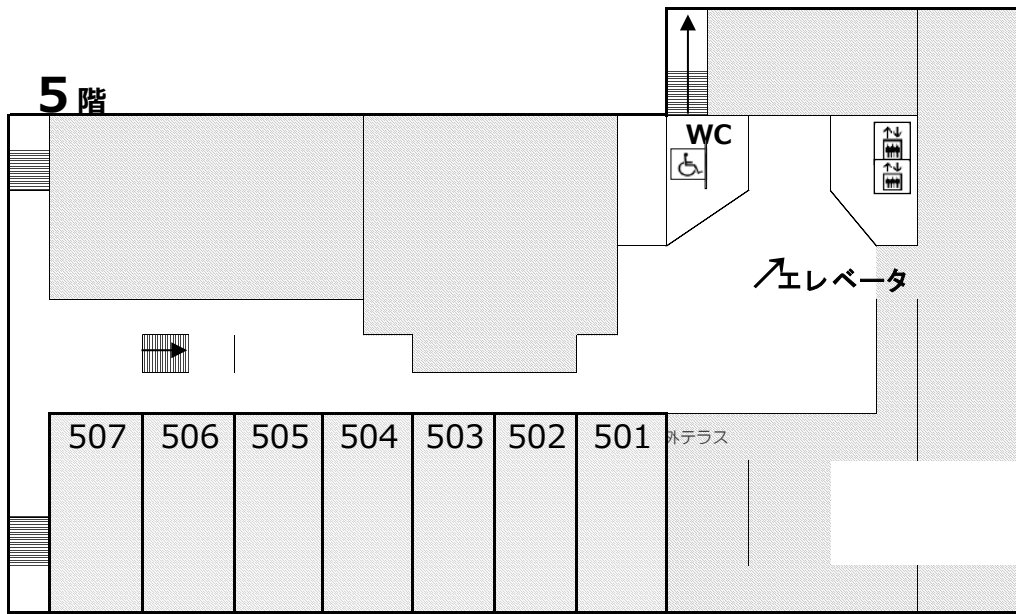
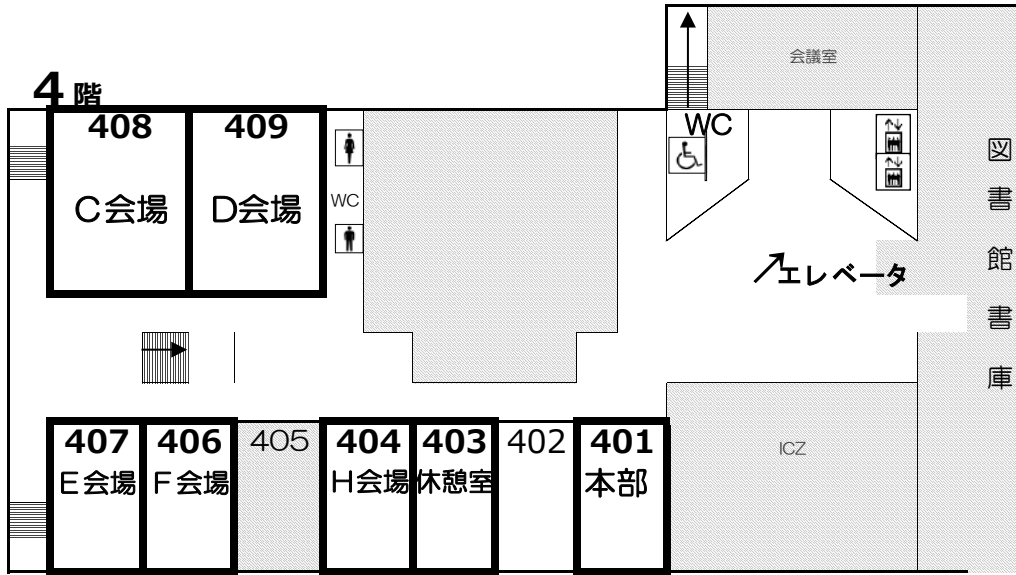
18:00~20:00 懇 親 会 (35周年記念館2階 学生食堂)

2016年 5月29日(日) 10:00~13:10				
5月29日	E会場(407教室)	F会場(406教室)	G会場(2階セミナースペース)	H会場(404教室)
	ブース発表	ブース発表	ポスター発表	大学ドイツ語入試展示
10:00~10:35			ポスターは引き続き掲示	大学ドイツ語入試問題 検討委員会 展示・発表 (10:00~12:00)
10:40~11:15				
11:20~11:55				
12:00~12:35	ブース発表V (11:30~13:00) Holger Schütterle Davide Orlando			
12:35~13:00				
13:05~13:10	閉会の挨拶(A会場・207教室)			

会場案内図

天野貞祐記念館





天野貞祐記念館 全体図



目 次

第 1 日 5 月 28 日(土)

シンポジウム I (14:30~17:30) A 会場 (207 教室) 1

意味的構造性に基づく文法構造をめぐって

Satzstruktur aufgrund der semantischen Struktur

司会／全体説明：森 芳樹

1. 英独語との比較による日本語の非制限的關係節の統語構造と意味論
橋本 将
2. ドイツ語非制限關係節の下位分類と日本語連体節との対照
城本 春佳
3. 経験者・所有者役割の具現
—英語の have 構文とドイツ語の与格構文の比較— 森 由美子・吉田 光演
4. ドイツ語と日本語の感嘆文における意味的構造性
伊藤 克将
5. „scheinen“ / 「ようだ」の証拠性とモダリティー —形式意味論の観点から
岡野 伸哉
6. ドイツ語における付加語的形容詞の語順の意味的構造性
森 芳樹

口頭発表：文学 I (14:30~17:05) B 会場 (206 教室) 6

司会：山路 朝彦・渡部 重美

1. 『パルチヴァール』における騎士の徳の問題化
松原 文
2. デア・シュトリッカーの『カール大帝』に見られるポピュリズム
田中 一嘉
3. 詩的「想像力」と政治的「共和制」
—ボードマーとクロプシュトックの分岐点— 今村 武
4. 音響学史から見たヘルダーリンのピンダロス断篇 "Vom Delphin"
縄田 雄二

口頭発表：文学Ⅱ（14:30～17:05） C会場（408教室）…………… 9

司会：宍戸 節太郎・Matthias Wittig

1. ウーヴェ・ヨーンゾンの詩学における／をめぐる「否定神学」的
修辞について 金 志成
2. 反転しうる「故郷への想い」 Heimat-Gefühl
—ウーヴェ・ヨーンゾン『記念の日々』における「故郷」 Heimat と
「異郷」 Fremde について 西尾 悠子
3. Wie ein Krimi ein Bestseller wird: Nele Neuhaus und ihre Kriminalromane
Oliver Mayer
4. 肌に刻み込まれる文字—多和田葉子『文字移植』における翻訳 林 英哉

口頭発表：ドイツ語教育（14:30～17:05） D会場（409教室）…………… 12

司会：柿沼 義孝・Marco Raindl

1. Lern(er)motivation durch Smartphone-Einsatz:
Sinnvolle Anwendung von QR-Codes im Fremdsprachenunterricht
Sven Körber-Abe
2. Dreidimensionale (3D) Visualisierungen von Texten für den Sprachunterricht
Markus Rude
3. Sprachgebrauch und Spracherwerb in aufgaben-orientierter Partnerarbeit
Axel Harting
4. アイデンティティと学習言語の関係性
—人生の「転機」はドイツ語学習者にどう影響するか— 甲藤 史郎

ブース発表 I (14:00~15:30) E 会場 (407 教室) 15

(ブース発表は途中での出入り自由です)

WEB 対応学習支援システム WebOCMnext およびダイナミック

教材のデモンストレーション

細谷 行輝・杉浦 謙介・阿部 一哉

ブース発表 II (14:00~15:30) F 会場 (406 教室) 15

(ブース発表は途中での出入り自由です)

フランス・アルザスにおける複言語・複文化能力養成のための

ドイツ語 (アルザス語) 教育

小川 敦・境 一三・治山 純子

ブース発表 III (16:00~17:30) E 会場 (407 教室) 16

(ブース発表は途中での出入り自由です)

Transkulturelle deutsche Konversationskurse unter Verwendung
traditioneller japanischer Spiele

Asuka Yamazaki

ブース発表 IV (16:00~17:30) H 会場 (404 教室) 17

(ブース発表は途中での出入り自由です)

(「大学ドイツ語入試問題展示会」会場で行います)

ドイツ語教育部会・大学入試問題検討委員会企画：「大学入試と外国語教育」

司会：清野 智昭・新倉 真矢子

発表 1：平高 史也・藁谷 郁美・白井 宏美

発表 2：藤田 保

ポスター発表 (13:00~14:30) G会場 (2階セミナースペース) 19
(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

Phonetische Bewusstheit und Bewusstmachung
im Deutsch-als-Fremdsprache-Unterricht.
Ein didaktisch-methodisches Konzept

David Fujisawa

だじゃれで覚えるドイツ語文法：イメージと笑いの機能を利用して

山崎 明日香

PASCH 校生によるドイツ語新聞 *JAPAN HEUTE* の制作
—13号発行に至るまでの4年間の試み

柴田 育子・Katrin Endres・能登 慶和

Sprachlernspiele - ein Unterrichtsmittel mit hohem pädagogischem
Potenzial - „Warum wir spielen“

Marco Schulze

第 2 日 5 月 29 日(日)

シンポジウム II (10:00~13:00) A 会場 (207 教室) 22

Autofiktion heute

**– Zur literarischen Konstitution des autobiographischen Subjekts
in der deutschen Gegenwartsliteratur**

Moderator: Leopold Schlöndorff

1. Dekonstruktion und Autofiktion. Über Paul de Mans Theorie zur Autobiographie
Kentaro Kawashima
2. „Autobiographie – *Ich war nie ein guter Genosse*“ – Zum Wechselspiel von
Faktizität und Authentizität in der Autobiographie „Tumult“ (2014) von
Hans Magnus Enzensberger Jin Yang
3. *Abfall für alle*, Rainald Goetz:
Mechanismen eines (s)ich performativ generierenden *Weltkunstwerks*
Masanori Manabe
4. „Von Geschichte hatte sie keine Ahnung, alles löste sich in Geschichten auf“.
Zu Felicitas Hoppes autofiktionalem Roman *Hoppe* Hiroshi Yamamoto
5. „Und wer war ich noch?“
– Funktionen der Autofiktionalisierung im literarischen Diskurs
Leopold Schlöndorff

口頭発表 : 文学 III (10:00~11:55) B 会場 (206 教室) 27

司会 : 高橋 輝暁・山本 淳

1. 18-19 世紀の庭園史の変遷と文学作品に描かれた庭園との関係
からの *Natur* と *Kunst* の考察 —ゲーテ『親和力』, ルソー
『新エロイーズ』を例に 伊東 麻衣
2. 末期の視力 —E. T. A. ホフマン『従兄の隅窓』— 清水 恒志
3. シュテファン・ツヴァイクの短編
『ある職業を思いがけず知ったこと』に見る大都市と人間 杉山 有紀子

口頭発表：文学 IV／文化・社会 (10:00～12:35) C会場 (408 教室) …………… 29

司会：古田 善文・工藤 達也

1. 保守革命の「文書」共同体について
—ホフマンスタールと E・ユンガーにおける「探究者」と「大衆」
の統一に対するまなざしを手がかりに 稲葉 瑛志
2. 現代における古典の上演傾向
—シラーの『たくらみと恋』を例として 丸山 達也
3. ドイツにおけるヴァンパイア受容
—1820 年代の仏独演劇・オペラ台本を中心に 森口 大地
4. Das Konzept der Theaterschule in den deutschsprachigen Ländern
in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts Asuka Yamazaki

口頭発表：語学 (10:00～12:35) D会場 (409 教室) …………… 32

司会：Angelika Werner・黒子 葉子

1. スイスドイツ語における存在表現の日常的使用 大喜 祐太
2. 類縁形式との比較を通して見たドイツ語未来形
werden＋不定詞の歴史的発展 嶋崎 啓
3. 不変化詞動詞における「余剰句」の生起とその解釈について 和田 資康
4. 嗜好述語, 接続法 I 式, 直示表現 高 裕輔

ブース発表 V (11:30～13:00) E会場 (407 教室) …………… 36

(ブース発表は途中での出入り自由です)

Inhaltsorientierter Unterricht ohne kurstragendes Lehrwerk im Anfängerunterricht.
Eine (selbst-) kritische und selbstreflexive Betrachtung durch die beteiligten
muttersprachlichen Deutschlehrer

Holger Schütterle / Davide Orlando

シンポジウム I (14:30~17:30) A 会場(207 教室)

意味的構造性に基づく文法構造をめぐって

Satzstruktur aufgrund der semantischen Struktur

司会／全体説明：森 芳樹

本シンポジウムで問題にするのは統語論と意味論、およびそのインターフェイスである。われわれが文法に興味を持つのは、その「からくり」のためではなく、そのからくり自体が持っている、深い人間性のためだ。意味が人間の認知と関わるのは当然だが、統語の構造性が意味的な構造性に深く根ざしており、言語の組み立ては人間の認知特性に大きく依存している。この問題を突き詰めるには、しかし、統語・形態構造と並んで意味的構造性（意味構成）についての理解を深めることが不可欠である。その中でドイツ語の研究は、研究が同様に進んでいるヨーロッパの他言語、そして日本語との比較対照と相俟って、新「事実」の発見に寄与することができるだろう。

本シンポジウムでは、関係文を用いる複文構造とそこに見られる視点、評価者の概念を捉えるモダリティーの問題を併せて論じることにより、統語と意味の関係性の一端を明らかにすることを試みる。まず橋本、城本の発表では、非制限用法をそれぞれ取り上げ、関係節について論じる。橋本の発表は、日本語の非制限的關係節の性質を形式意味論・生成文法的な関心から他言語での研究に目を配りつつ分析する。城本はこれに対し、意味機能論の立場から記述文法、日独対照言語学の手法で、同じ問題に迫る。分析についてはほぼ同じ結果が得られるが、その理論的定位置が異なる。これについて時間が許す限り、吉田が統語論的に制限用法を扱う観点から、短いコメントを行う。橋本は同時に、視点問題との関係を論じる基盤も提供する。この視点の問題と所有意味を交差させた地点で格意味論の歴史的発展を説こうというのが、森（由）・吉田の発表である。

後半の伊藤、岡野、森の発表では、現実性、抽象性、モダリティーといったものが文法の中にどのように組み込まれており、現実の文の意味解釈に影響を与えているかを示していく。伊藤の発表では、感嘆文におけるドイツ語の心態詞や日本語の終助詞の振る舞い、形容詞・副詞との共起などに着目して、一部の感嘆文においては「程度」の意味特徴が義務的であること、また事実性を示す統語演算子はすべての感嘆文に存在するわけではないことを示す。岡野の発表は、„scheinen“ と「ようだ」がそれぞれどの程度モダリティー的であるのか、あるいは証拠的であるのかという議論を通じて、モダリティー・証拠性という概念の形式意味論的定義を求める。森の発表では付加語形容詞の語順を取り上げ、とりわけドイツ語における後置修飾に着目し、直接・間接修飾と指示・指示物修飾の区別を

提案する。シンポジウムの最後には、感嘆文、モダリティー、形容詞語順などに見られる統語的特性を踏まえて再び関係節との関連性を指摘し、全体として一体のシンポジウムを形成していることを示したい。

1. 英独語との比較による日本語の非制限的關係節の統語構造と意味論

橋本 将

Cinque (2008, 2013) によると、言語によって非制限的關係節の種類は異なっており、ドイツ語の非制限的關係節には制限的關係節のように文の統語構造に統合されている (*integrated*) ものと、そうでないもの (*non-integrated*) があるが、日本語の非制限的關係節には *integrated* なものしかない。Cinque は、Ishizuka (2008) らの研究に基づき、日本語の非制限的關係節は制限的關係節のように名詞的投射内に存在するという主張をしているが、本発表は、非制限的關係節は統語的にはシンプルな局所的構造を持ち意味的には発話の中心的な意味内容 (*at-issue content*) と別次元にあるという多次元的分析 (Potts 2005) では日本語の非制限的關係節の振る舞いの説明が難しいことを示す。そして、Schlenker (2010) がフランス語の *integrated* な非制限的關係節 (*qui* で導入される非制限的關係節) に関して主張しているように、日本語の非制限的關係節は統語的には主名詞を支配する CP に付加され (つまり、文の統語構造に統合されてはいるものの名詞的投射の外に存在することができ)、意味的には発話の中心的な意味内容と同一の次元にあると主張する。

2. ドイツ語非制限關係節の下位分類と日本語連体節との対照

城本 春佳

ドイツ語非制限關係文の非統一性は先行研究でも繰り返し指摘されており (Brandt 1990, Holler 2005 等)、またドイツ語だけでなく英語 (Loock 2007 等) や他のヨーロッパ言語 (Cinque 2008 等) でも同様の指摘がなされている。特にドイツ語に関する先行研究では、*Relativsatz* (以下 RS) の配語的特徴 (先行詞に隣接するか、主文に後置されるか)、音韻的特徴 (關係文前後の休止やイントネーション)、統語的特徴 (主文に c 統御されるか否か等)、情報構造的特徴などいくつかの基準によってその非統一性が指摘されている。

本発表では、特に主文への従属度の観点から、ドイツ語の非制限 RS が階層的であることを示し、主文に対し従属接続の關係にある「同格的 RS」、等位接続の關係にある「継続的 RS」、文の連続を超えて解釈される「挿入的 RS」の三つに分類されることを提案する。更に、日本語の非制限連体節との対照を通して、日

本語の連体修飾節は同格的 RS と同等の従属度を持っており、それより高い独立性を持つことはできないことを示す。また、このような相違は、関係代名詞の持つ指示性と、文内での動詞の位置という言語構造に起因することを指摘する。

3. 経験者・所有者役割の具現

—英語の have 構文とドイツ語の与格構文の比較—

森 由美子・吉田 光演

本発表では、主格と対格の間にある与格の統語構造における位置づけ、及び、動作主と主題の間にある経験者という主題役割について、英語・ドイツ語で比較することによって、＜意味的構造性と文法構造＞の問題に迫る。

英語もドイツ語も所有の HAVE (have, haben) は基本的に同一の統語的・意味的關係にあるが、Ritter and Rosen (1997) が分析するように、英語 have は軽動詞として意味が希薄化し、機能範疇を投射し、[使役者-事象]、[経験者-事象] のような複文構造を投射する。その際、Chomsky (1995) の生成文法理論における EPP (拡大投射原理) によって、主格主語の優位性が保持される (経験者主格)。一方、ドイツ語には経験者与格があり、[経験者-事象] 構造が与格で表される。このことから、英語の have 構文とドイツ語の経験者構文が類似の意味構造を持つことが予測される。現代英語では、中期英語の時代に起きた格水平化現象の結果、与格と対格の相違がなくなり、経験者与格は消失したかのように見える。しかし、動詞の項構造において経験者がいかに現れ、文・節の統語構造としていかなる形で具現し、拡張するかという主題役割-構文関係の問題は残る。事象の影響を受ける経験者の意味役割は通言語的に横断すると考え、現代英語では have 構文の拡張タイプの一つとして経験者表現が具現化すると仮定し、英語とドイツ語を比較する。具体的には、have, haben 構文の相違、ドイツ語所有与格と have の複文構造と比較し、意味論的対応を分析する。

4. ドイツ語と日本語の感嘆文における意味的構造性

伊藤 克将

ドイツ語の感嘆文はその形式が非常に多様であり、分析においては統語論・意味論よりも語用論に委ねられるべき部分が多いことが、以前より指摘されてきた (vgl. Fries 1988, Rosengren 1992)。これに関しては英語など他言語の研究においても例外ではなかったが (vgl. Huddleston 1993), Zanuttini & Portner (2003) は生成文法理論を用いて、英語やイタリア語の感嘆文を統語論・意味論のレベルで捉えていくことを提案した。Zanuttini & Portner (2003) によれば、感嘆文を特徴

づけているのは、感嘆文専用の *wh* 句と事実性を示す統語演算子であり、これらの二つの統語的要素の意味論上の貢献によって、感嘆文の解釈が生じるという。従来、語用論に委ねられていた説明を、統語論・意味論において捉えた彼らの提案は注目に値するが、ドイツ語や日本語のデータを詳細に検討していくと、問題点があることが分かる。本発表では、感嘆文におけるドイツ語の心態詞や日本語の終助詞の振る舞いや、形容詞・副詞との共起、また談話上の振る舞いを観察した上で、一部の感嘆文においては「程度」の意味特徴が義務的であること、また事実性を示す統語演算子はすべての感嘆文に存在するわけではないことを指摘する。その上で Zanuttini & Portner (2003) の分析に修正を施し、Degree Phrase という機能範疇 (Corver 1990, Rett 2008) を導入することで、統語論・意味論のレベルにおいてドイツ語と日本語の感嘆文を捉えていくことを提案する。

5. „scheinen“ /「ようだ」の証拠性とモダリティー —形式意味論の観点から

岡野 伸哉

ドイツ語の „scheinen“ および日本語の「ようだ」は、ともに証拠的な表現であるということがしばしば指摘される。つまり、両者はそれぞれ、自らの意味的射程の中に収めている命題が真であるということに対して、話者が何らかの証拠を有しているということを示す語である、という指摘がなされている(例：Diewald & Smirnova (2010); Aoki (1986))。一方で、両者についてはそれぞれモダリティ表現であるとの主張も存在する(例：Duden (2006) ; 益岡 (1991))。本発表は、形式意味論においてモダリティを検出するために用いられる一連のテストをもとに、これらの表現が典型的なモダリティ表現とは異なる振る舞いを示すことを主張するとともに、既存の証拠性・モダリティに関する形式意味論的分析 (McCready & Ogata (2007), Davis & Hara (2014)) をそのまま適用することの問題点を指摘し、より良い形式的分析の可能性を探る。

ある言明に対する証拠を表現するという意味での証拠性と、現実の在り様とは異なりうる可能性を表現するという意味でのモダリティは、概念的には一見別個のものに見える一方で、文法カテゴリとしての位置づけは研究者によって様々である。本発表は、言語表現の論理的・形式的側面に着目する形式意味論の立場から、„scheinen“ と「ようだ」がそれぞれどの程度モダリティ的であるのか、あるいは、証拠的であるのかということ、個々のテストを基に記述することにより、モダリティ・証拠性という 2 つのカテゴリの相互の位置付けに対する理解をより深めることを狙いとする。

6. ドイツ語における付加語的形容詞の語順の意味的構造的性

森 芳樹

本発表では、ドイツ語における付加語的形容詞の語順を、日本語、英語などとの対照において扱う。ドイツ語の形容詞語順については、すでに Duden Grammatik (2009:§462) においても以下のような順序が示されている：

(1) Zahlen < rel. (Raumzeit) < qualifizierend < rel. (Stoff) < rel. (Herkunft, Bereich)

さらに英語 (安井・秋山・中村 1976) や言語横断的な議論 (Cinque 1994) においても意味野による順序が提案されてきた：

(2) Quality < Size < Shape < Color < Nationality < N (Cinque 1994)

これに対して近年の提案は、より大きな意味的分割に基づくものとも言える。(正確には、これも指示修飾 vs. 指示物修飾などという対立で議論されたこともあるように長い議論の伝統に立つものではある。)

本発表では、これら近年の「大分割理論」の議論を跡付けながら、まずロマンス諸語とゲルマン諸語の直接修飾、間接修飾の分布に関する相違点を明らかにする。さらにドイツ語における後置修飾に触れ、この分析のために直接・間接修飾と指示・指示物修飾の区別を提案する。理論的にはこれによって、統語論・意味論インターフェイスにおいて意味論の側からの付加語形容詞語順の説明が可能となると考える。

口頭発表：文学Ⅰ（14:30～17:05）B会場（206教室）

司会：山路 朝彦・渡部 重美

1. 『パルチヴァール』における騎士の徳の問題化

松原文

ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハは、『パルチヴァール』のプロローグにおいて *triuwe* (誠) を作品のテーマとし、重要な場面でこの概念を繰り返し扱っている。しかし、原典となったクレティアンの『ペルスヴァール』に、*triuwe* 該当する言葉は存在しない。また、アーサー王物語を最初にドイツ語へと翻案したハルトマン・フォン・アウエの作品では、騎士の最重要の美德のひとつとして *triuwe* が取り上げられるが、語られる頻度は低く、筋の動機となるほどの位置にはおかれていない。

『パルチヴァール』における *triuwe* 概念の扱いの特徴として、ハルトマンの作品と比較した際に注目されるのは、*triuwe* がアーサー王宮廷を守る騎士のみに求められる徳ではなく、宮廷に属さない若きパルチヴァールや、クンドリエやフェイレフィースのような異邦人、女性たちにも初めから備わっていることである。彼らの *triuwe* は家族や目の前の人物に対して向けられる。一方、アーサー宮廷社会の名誉のために邁進するガーヴァーンは、宮廷に対する *triuwe* を追求する。だがそれは、最も親い人を裏切り、宮廷に逆に損失を強いる結果にもなる。

ヴォルフラムはアーサー王物語の定石といえる二段階の物語構造とその世界観を一見踏襲しているかに見える。しかし実際には、クレティアンによる主人公の二重化（パルチヴァールとガーヴァーン）というアイデアを手掛かりにして、アーサー王宮廷の論理やその価値を外部世界と突き合わせ、相対化している。

2. デア・シュトリッカーの『カール大帝』に見られるポピュリズム

田中 一嘉

13世紀前半の詩人デア・シュトリッカーは、従来の「宮廷文学」の枠組みを超え、*mære* (*kurze Verserzählung*) という独自の形式を確立し、滑稽譚も残している。文学史研究において、これら新しい形式の革新性が一定評価されている一方、詩人の詩作に対する意識にまで踏み込んだ研究は多くない。そこで本発表では、彼の創作初期の作品と思われる叙事詩『カール大帝』を中心に、シュトリッカーの詩作に対する意識・姿勢を考察していく。

『カール』は、コンラート版『ローラントの歌』を翻案したものだが、十字軍モチーフを背景とした国家的・宗教的プロパガンダの傾向が強いコンラート版に比して、詩人の芸術家としての自負あるいは使命感とともに、聴衆・読者に向

けた批判的言説が目立つ。これらの言説において詩人が意識したであろう受容者層の射程および詩作に込めた意図について、「ポピュリズム」というキーワードの下に分析する。この語は本来、エリート層に対抗する陣営（大衆）に与して政治的言動を敷く当事者の「姿勢」を意味しているが、本発表ではこの語の持つ意味を、文学作品の受容者に向けられた詩人の心的態度にも援用している。この分析を通じて、彼が詩作の受容者として期待した人々が、実際どの社会階層に属し、どの程度の教養を身につけていたかに関しては複数の選択肢が浮上するものの、宮廷文学の伝統の継承と革新のせめぎあいの中で、シュトリッカーは、芸術としての詩作、そして芸術家としての詩人の在り方を広く世に問おうとしていると言えよう。

3. 詩的「想像力」と政治的「共和制」—ボードマーとクロプシュトックの分岐点

今村 武

17世紀末葉から18世紀中葉ドイツ語圏スイスの文人とライツプツィヒの学者、詩人を中心に展開する文学と詩的想像力にかんする論争は、新たな評価を必要としている。ボードマーとブライティンガーの詩学は、スイスを超えて広く影響した「文学的共和主義」の観点から検証されるべきであろう。

ドイツ語圏スイスの文学は、絶対主義国家における市民的公共の場の成立という観点から、近年は研究対象として取り上げられている。本発表は、18世紀チューリヒに生きたボードマーとブライティンガーが強調している詩人としての「道徳性」、共和主義的な「徳」、それらと文学的・詩的「想像力」との関係を検討し、シュトゥルム・ウント・ドラングの源流の一つスイスの「文学的共和主義」を新たに説明することを目的とする。スイス派の唱える詩的「想像力」の持つ政治的側面と、文学的共和主義との起爆力をその成立時に立ち返って分析することには一定の意義があると思われる。

本発表はボードマーとブライティンガーの初期作品、週刊誌、書簡等にも立ち返り、文献学的研究を基盤としつつ、クロプシュトックとスイス派の「想像力」と詩的「創造性」の詳細と差異と詳らかにしたい。これによりクロプシュトックのチューリヒ滞在の新しい成果を見出す。両者の邂逅を契機として浮かび上がる詩論の内容と背景を明らかにすることが主目的であるため、スイス派とクロプシュトックの詩学の影響力を解明することが今後の課題である。

4. 音響学史から見たヘルダーリンのピンダロス断篇 "Vom Delphin"

縄田 雄二

ヘルダーリンは古代ギリシアの詩人ピンダロスのいくつかの断片的な詩句を独創的に解釈してドイツ語に訳し、それぞれに詩的で謎めいた散文を添えた。そのうち"Vom Delphin"と題された断篇（ドイツ語訳+散文）を論ずる。

ヘルダーリンの文業は、文学史のみならず、さまざまな文化史にも属する。例えばヘルダーリンが音響学の知識を表現した文言は、音響学史にも属する。ピンダロス断篇についてのこれまでの研究は、この意識が希薄であった。発表では、この断篇を音響学の観点から読み直す。

この断篇には、私の見る所、イルカが音を水の振動として感知するという認識が反映している。音は、音響を発する物体の振動が、媒体（通常は空気）を震わせ、ついには感知者の身体をも振動させることにより、感知される、という、ヨーロッパが時間をかけて育ててきた音響学と断篇との照応を主張したい（この断篇の場合、媒体は水であり、この独創性が適切な読みを阻んできた）。

さらに、ヘルダーリンと音響学との関係がこの断篇に限らぬことを、別の作品（詩「平和の祝い」）について確かめたい。近代に身を置きながら古代を読み直し、そこに音響学の知見を反映させた文学作品は、ヘルダーリンの同時代人、朝鮮の丁若鏞にも例がある。両者の比較に踏み込み、直接の関係の無い二者を地球規模の学問史あるいは文化史という枠のなかで比べる比較文学の手法を例示したい。

口頭発表：文学Ⅱ（14:30～17:05）C会場(408教室)

司会：宍戸 節太郎・Matthias Wittig

1. ウーヴェ・ヨーンゾンの詩学における／をめぐる「否定神学」的修辞について

金 志成

ヨーンゾンが詩学テキスト『ベルリンのSバーン』（1961）で主張した「全知の語り手の否定」は、デビュー長篇『ヤーコプについての推測』（1959）における「推測文体」の根拠として70年代ごろまでの先行研究でナイーヴに利用されてきたが、小説テキストを統計学的に分析したりオーダンが「語り手が現実に全知でないことを証明するものは何もない」ことを、すなわち彼が実際には「神の視点」を持つことを否定的に証明したことを皮切りに、先の主張がその実践であるべき物語テキストにたいする理論として、あるいは構造主義的物語論のコンセンサスに鑑みて、根本的な矛盾を孕んでいることが90年代以降指摘されてきた。しかし以上のようなりオーダンの話法は、ヨーンゾンが別の詩学テキスト『長篇小説を検討するための諸提案』（1973）で表明した文学作品における「モラル」の拒絶、その帰結としての「真実探求」のプログラムが、徹底的な対話形式という否定的な「倫理」によって逆説的に支えられていることと表裏一体をなしている。本発表は、一方でヨーンゾンの詩学プログラムである「真実探求」に、他方でヨーンゾン作品の語り手が「非全知」ではないことを否定的に証明しようとする先行研究に、否定神学的な話法という同根の問題を見出し、両者のテキストを修辞的な次元で脱構築的に分析することで内容把握的な読解では捉えきれない盲点を浮き彫りにし、いわば否定性に否定性を掛け合わせることで作家の詩学の肯定的な契機として見出すことを試みる。

2. 反転しうる「故郷への想い」Heimat-Gefühl —ウーヴェ・ヨーンゾン『記念の日々』における「故郷」Heimat と「異郷」Fremde について

西尾 悠子

本発表はウーヴェ・ヨーンゾンの長編小説『記念の日々 ゲジーネ・クレスパールの生活より』*Jahrestage. Aus dem Leben von Gesine Cresspahl*（1970-1983）における故郷の問題を論じる。この問題に関しては、本作の主人公ゲジーネの「すでに失われた故郷」（イェーリヒョー）と、彼女の思い描く「望ましい故郷」（民主的な社会主義）を中心とした議論が、Pokay（1982, 1983）、Mecklenburg（1986, 1997）、Baker（1993, 1999）らによって展開されてきた。これらの先行研究において「故郷」Heimat は、無条件に安心感および信頼感を与える空間として概して肯定的に位置づけられ、「異郷」Fremde は「故郷ではない空間」として否定的

に、すなわち「非 - 故郷」 **Nicht-Heimat** として捉えられてきた。また、研究の対象は主にゲジーネひとりに絞られており、彼女を取り巻く人々が直面している故郷の問題については、踏み込んだ考察はなされていない。本発表では、故郷という空間が『記念の日々』において肯定的にも否定的にも捉えられている点に着目する。ゲジーネの両親、ハインリヒとリースベートの事例から、両者の抱く「故郷への想い」 **Heimat-Gefühl** を「故郷」、「異郷」と「非 - 故郷」という異なる観点から検討し、(1)『記念の日々』における異郷が必ずしも非 - 故郷として描かれていないこと、(2) 故郷が安心感・信頼感を確約する空間ではないことを示し、(3)『記念の日々』における故郷の像が多様で複雑であることを主張する。

3. Wie ein Krimi ein Bestseller wird: Nele Neuhaus und ihre Kriminalromane

Oliver Mayer

Kriminalromane gehören zu den populärsten Gattungen der Literatur. Viele bekannte Krimis sind vor allem von englischen, amerikanischen und schwedischen Autoren geschrieben worden, deutsche Autoren findet man nur selten in den Bestsellerlisten. Zu den Ausnahmen gehört Nele Neuhaus, die mit dem 2010 veröffentlichten Krimi „Schneewittchen muss sterben“ den internationalen Durchbruch schaffte. Dieser Roman ist innerhalb von fünf Jahren bereits in 15 Sprachen übersetzt worden; Neuhaus' Gesamtauflage wird mit etwa fünf Millionen Exemplaren angegeben.

Eine Analyse dieses Kriminalromans soll zeigen, dass sein Erfolg nicht auf besonders innovativen Kriminalgeschichten, sondern überwiegend auf einer Mischung bekannter „Rezepte“ beruht:

1. Der Roman spielt im Taunus, wobei die Handlungsorte detailliert beschrieben werden („Regiokrimi“).
2. Alle Personen stammen aus einem Dorf. Dieser geschlossene Personenkreis ermöglicht den Detektiven (und damit auch dem Leser), den Täter in einer klar abgegrenzten Gruppe zu suchen („Landhauskrimi“).
3. Die Anzahl der Verdächtigen ist sehr groß, Detektive und Leser werden ständig mit neuen Verdächtigen konfrontiert („Rätselkrimi“).
4. Neben der Polizeiarbeit nimmt die Schilderung des Privatlebens der Hauptfiguren viel Platz ein („Serie“).

4. 肌に刻み込まれる文字 —多和田葉子『文字移植』における翻訳

林 英哉

多和田葉子はドイツ語と日本語の二つの言語で創作する稀有な作家であり、それゆえ複数の言語の架橋＝翻訳もまた、彼女の関心の中心にある。日本語で書かれた小説『文字移植』（1999、初出は1993）において、職業翻訳家である「わたし」が行う翻訳は、徹頭徹尾、語に語を置き換えただけで文としての意味を成さない、ヘルダリン以上の逐語訳である。しかし、まさにそれによって、言葉の最小単位である「文字」の側面が鋭く切りだされる。例えば、「Opfer」の「Maul」、すなわち「いけにえ」の「口」という表現において、「O」から「口」へという、意味ではなくイメージの連関による「文字の翻訳」が生じている。これは先行研究でもすでに指摘されてきた側面であるが、我々がより注目すべきは、その「O」が脚の指を内出血させる「小石」へと変化し、さらに傷つけられていく「わたし」の肌に象徴化されることである。多和田は、肌に刻み込まれていくように実感される文章を理想とすると、あるエッセイの中で語っている。つまり、ここで行われているのは、いわば「文字の物質性」（ポール・ド・マン）とも呼ぶべき言葉の危険な魅力を、いかに自らの文学作品に導入するかという試みに他ならない。このラディカルな逐語訳は、単なる翻訳論ではなく文学論のレベルで捉えられるべきものであり、翻訳がオリジナルに従属する二次的存在以上のものであることを示しているのである。

口頭発表：ドイツ語教育(14:30~17:05) D会場(409教室)

司会：柿沼 義孝・Marco Raindl

1. Lern(er)motivation durch Smartphone-Einsatz:

Sinnvolle Anwendung von QR-Codes im Fremdsprachenunterricht

Sven Körber-Abe

Das Anbieten von Lehrangeboten und -materialien in „moderner“, d.h. in mit PCs, Tablets oder Smartphones nutzbarer Form, muss nicht automatisch auch einen wirklichen Lernerfolg mit sich bringen. Ganz im Gegenteil: beispielsweise zeigt das Angebot vieler Verlage, die notwendigen Audio-Materialien aus dem Internet herunterladen zu können, bei einer konkreten Anwendung in der Unterrichtspraxis manchmal sogar einen Rückschritt gegenüber den angeblich altmodischen Medienformen wie CDs oder Kassetten. Folglich sollte der Nutzung moderner Medien immer auch eine grundlegende Überlegung vorhergehen, in welcher Art und Weise (bzw. ob überhaupt) ein reeller Vorteil gegenüber den althergebrachten Lernmethoden und -mitteln geschaffen werden kann.

Wie Nachteile internet-basierter Lehrmittelangebote auftreten können, wird in diesem Vortrag an zwei konkreten Beispielen aus der Unterrichtspraxis erläutert, nämlich dem Einsatz verschiedener Audiomaterialien sowie einer Vokabel-Lernapplikation. Ebenso werden Möglichkeiten gezeigt, wie durch relativ einfache technische Mittel, z. B. dem schnellen Zugriff durch QR-Codes oder direkten Links, eine weitaus höhere Akzeptanz und Nutzung derselben Materialien durch die Sprachlerner erreicht werden kann. Die diesen technischen Neuerungen zugrunde liegenden Überlegungen zur Evaluation und Anwendung von multimedialen Lehrmaterialien bleiben dabei nicht nur auf die genannten Beispiele beschränkt, sondern können ebenso als Grundlage zur effektiven multimedialen Darbietungsform von zukünftigen Lehrangeboten dienen.

2. Dreidimensionale (3D) Visualisierungen von Texten für den Sprachunterricht

Markus Rude

Viele von Ihnen haben den 3D-Film Avatar gesehen. Bald könnten derartige 3D-Visualisierungen auch für das Sprachenlernen angewendet werden. In diesem Vortrag sollen zwei mögliche Anwendungen vorgestellt werden, und zwar Glossing mit Worterklärungen „hinter“ dem Text, und „Prosodische Schrift“, eine Schriftform, die durch ihre 3D-Gestalt Prosodie (Intonation, Rhythmus) sichtbar macht. Solche

Anwendungen würden das Gehirn von Sprachenlernern besser nutzen, denn ein Großteil unserer Hirnrinde ist auf 3D-Sehen spezialisiert; hierbei werden aus Unterschieden zwischen den 2D-Bildern der beiden Augen Tiefeninformationen gewonnen. Bei kleinen Bildunterschieden entsteht ein *echter 3D-Eindruck* (z. B. sphärische Gestalt eines Apfels), bei großen Unterschieden (z. B. Hand vor Haus) entstehen *Doppelbilder*, man sieht – je nach Fokussierung - entweder das näher oder das weiter entfernte Objekt. Beide Effekte lassen sich für das Sprachenlernen nutzen: erstgenannte Anwendung (Glossing), indem beim Lesen eines Haupttextes die Erklärungen im „Hintergrund“ durch den Doppelbildeffekt nahezu unlesbar sind, aber durch Fokussierung jederzeit und schnell gelesen werden können. Die zweite Anwendung (Prosodische Schrift), indem durch die 3D-Gestalt der Schrift Prosodie sichtbar wird, was ihren Erwerb unterstützt. Teilnehmer werden durch Rot-Grün-Brillen Gelegenheit haben, diese Effekte selbst empfinden zu können. Die gezeigten Prototyp-Realisierungen dienen lediglich der Demonstration des Konzepts, für eine Anwendung im Klassenzimmer sind sie noch nicht geeignet.

3. Sprachgebrauch und Spracherwerb in aufgaben-orientierter Partnerarbeit

Axel Harting

Der Beitrag widmet sich den Ergebnissen einer im Sommersemester 2015 durchgeführten Untersuchung zum Sprachgebrauch von Deutschlernenden im zweiten Studienjahr (GeR A1) bei der Durchführung von Interview- und Feedbackaufgaben. Ziel der eigens dafür entwickelten Aufgaben war es, die Lernenden zu mehr Flüssigkeit und Spontaneität beim Gebrauch der L2 zu befähigen und gleichzeitig ihr grammatisches und lexikalisches Wissen zu erweitern. Die Daten zur Sprachverwendung wurden in Form von Tonbandaufnahmen während der Einlösung der Interview- und Feedbackaufgaben erhoben. Die sowohl quantitativ als auch qualitativ orientierte Datenauswertung berücksichtigte neben der Sprachwahl der Lernenden für bestimmte, die Erfüllung der Aufgabe begleitende Funktionen, auch die Art und Weise, wie Bedeutungen ausgehandelt werden, wie mit Verständnisschwierigkeiten umgegangen und über Sprache reflektiert wird und ob Fehler selbst- oder fremd-initiiert korrigiert werden. Die daraus hervorgegangenen Ergebnisse sollen verdeutlichen, wie und für welche Zwecke sich die Lernenden bei der Einlösung kommunikativ-orientierter Aufgaben ihres mutter- bzw. ihres zielsprachlichen Repertoires bedienen. Mittels einer schriftlichen Befragung der Lernenden nach Beendigung des Kurses wurde die Konzipierung und Durchführung der Aufgabe weiterhin einer kritischen Evaluation unterzogen, um zu prüfen, inwieweit sie dem eingangs gesetzten Ziel gerecht werden konnte.

4. アイデンティティと学習言語の関係性

—人生の「転機」はドイツ語学習者にどう影響するか—

甲藤 史郎

SLA 研究では、学習者のアイデンティティ（以下 ID）を巡る議論が 2000 年前後から活発となり、現在では学習者オートノミーやモチベーションと相互に関連する重要な要素とみなされている（Murray, Gao & Lamb 2013, Norton 2014）。ID は自己決定を行うときの心的な枠組みとなるものであり（仲正 2003）、ドイツ語学習者の人生における「転機」（桜井 2002）が ID に影響を与えるならば、自己とドイツ語の関係に対する主観的な意味づけが変容し、学びに関わる決定のあり方は質的に変わることが示唆される。

本発表では、ライフストーリー法のインタビュー（桜井 2002）に基づく事例研究を取り上げ、2 名の調査協力者から得られた結果を報告する。サンプリングの条件は、すでに大学を卒業しており、学生時にドイツ語を第一外国語とし B1 から B2 程度の語学レベルに到達していたこと、そして現在は、仕事上でドイツ語との関わりを持たないこととした。その理由は、第一に大学生と社会人の間には何らかの「転機」があると推測されるためであり、第二にドイツ語を第一外国語として学んだ大学生たちが少なからず経験するであろうケースだからである。

学校教育を越えて、学習者の生涯にわたる文脈上で、自己とドイツ語の動的な関係を質的に見ることにより、ドイツ語教育が学習者に関わるためのさらなる可能性を「リソース」（石川 2012）として拓くことができれば有益であろう。

ブース発表Ⅰ（14:00～15:30） E 会場（407 教室）

（ブース発表は途中での出入り自由です）

WEB 対応学習支援システム WebOCMnext およびダイナミック教材のデモンストレーション

細谷 行輝・杉浦 謙介・阿部 一哉

e-Learnig 形式の授業が進まない最大の理由の一つは、個々の教師の教育方針に合致するホームページ教材が圧倒的に不足している事にある。しかしながら、この種の授業は、デジタルの特性を活かして、対面授業での教師の負担を大幅に軽減する可能性をも秘めている。そこで、本発表では、国立七大学外国語 CU 委員会(北大，東北大，東大，名大，京大，阪大，九大が外国語教育の改革・デジタル化を目指して 2003 年 10 月に設立)の支援の下，長年に渡り，主として大阪大学が開発して来た WEB 対応授業支援システム「WebOCMnext(ウェブ・オーシーエム・ネクスト)」，並びにその中核をなす「ダイナミック教材作成システム」について，実演を交えながら，その可能性を示す。

特に，「ダイナミック教材作成システム」は，教材を作成するだけで，1)学習者のビッグデータ（学習進捗状況，成績状況等）を自動で記録・分析し，2)個々の受講生の個別データに基づき，半自動での個別フィードバックを可能とするなど，通常の教材では考えられない高度な機能を自動で実現する。すなわち，データに基づいた「手厚い教育」，Data Education を可能とする。また，「ダイナミック編集機能」により，教材内容そのものをリアルタイムに学生個人個人の好みの形に再編集する機能，誤った解答のみをワンタッチで選別し，テスト化する機能等，先端的な機能が満載されている。

ブース発表Ⅱ（14:00～15:30） F 会場（406 教室）

（ブース発表は途中での出入り自由です）

フランス・アルザスにおける複言語・複文化能力養成のためのドイツ語(アルザス語)教育

小川 敦・境 一三・治山 純子

フランスでは，唯一の公用語であるフランス語が教育の基本言語として用いられる一方で，ブルトン語，コルシカ語などの地域語も教育で用いることが認められている。

本発表では，地域語の一つであるアルザス語（ドイツ語）の教育に焦点を当て

る。フランス・アルザス地方では、東部ロレーヌ地方とともに土着の住民の多くはゲルマン語を母語としてきたが、フランスの共和主義・中央集権によるフランス語普及政策のもと、土着の言語・アルザス語は徐々に衰退し、標準フランス語に置き換わりつつある。しかし、先行研究の示すように、フランスの他の地域語と比較するとアルザス語は比較的維持されている。この要因として、ドイツ語を習得することの経済的な利点、欧州統合の進展によりドイツとの人の行き来がしやすくなったことなどがあげられる。

本発表では、フランスの言語政策、アルザスにおける地域語政策の経緯や、近年欧州全体で見られる複言語・複文化主義政策の中での言語教育政策の位置づけを試みる。同時に、2015年3月・2016年3月の現地の学校視察およびインタビュー調査に基づき、3人の発表者がそれぞれの専門的な立場から分析を行う。特に、一教員・一言語の原則を貫き、独仏語で同時に識字教育を行う私立学校の状況、および対照的に一教員が独仏語のどちらも教えるように移行しつつある公立学校の状況を紹介し、考察する。これまで調査を行ってきた欧州の他地域の状況とも比較しながら、バイリンガル教育と複言語・複文化能力養成の方向性を議論する。

ブース発表 III (16:00~17:30) E 会場 (407 教室)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

Transkulturelle deutsche Konversationskurse unter Verwendung traditioneller japanischer Spiele

Asuka Yamazaki

Dieser Workshop berichtet über transkulturelle deutsche Konversationskurse, in denen traditionelle japanische Spiele eingesetzt wurden, und analysiert die Lernmotivation sowie Lerneffekte bei den Studierenden. Nicht nur die Erziehungswissenschaft („Gamification“-Konzept von Zicherman und Cunningham 2011; Fujimoto 2015), sondern auch die Neurowissenschaft („Gaming“-Konzept von Howard-Jones 2012) weisen positive Forschungsergebnisse im Zusammenhang mit der Einführung von Spielen im Unterricht auf. Auch die Motivations- sowie die Goaltheorie im Bereich der pädagogischen Forschungen (Ames und Archer 1988; Schunk und Zimmerman 2008; Brophy 2010; Hattie 2012) sind zu nennen. Basierend auf diesen Ansätzen versuchte die Referentin die folgenden japanischen Spiele und Aktivitäten aus dem Mittelalter bis zur Gegenwart in deutschen Konversationskursen durchzuführen: 1. 福笑い (*Fukuwarai*, das beliebte Familienspiel); 2. ミニチュア枯山水 (*Karesansui*, der Miniatur-Zengarten); 3. 貝合わせ (*Kaiawase*, Shell-Matching-Spiel), das von Aristokraten im

Mittelalter am Hof gespielt wurde; und 4. 百人一首 (*Hyakunin Isshu*, in Planung). Unter der Meiji-Regierung wurden Spiele als eine problematische Tätigkeit angesehen, die die soziale Produktivität verringere (Masukawa 2014), und diese negative Vorstellung besteht noch in der Gegenwart fort. Diese Spiele haben jedoch eine große erzieherische Wirkung als „kulturelle Transplantation“ (Wirth 2011) beim Lernen von Gesprächsführung in jeder Fremdsprache. Die Referentin intendierte auch die Verwendung der Fremdsprachen als Medium, nicht nur um die traditionelle Nationalkultur zu beleben, sondern auch um eine transkulturelle Auswirkung auf die Studenten zu erzielen.

ブース発表 IV (16:00~17:30) H 会場 (404 教室)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

(「大学ドイツ語入試問題展示会」会場で行います)

ドイツ語教育部会・大学入試問題検討委員会企画:「大学入試と外国語教育」

司会：清野智昭・新倉真矢子

本ブース発表では、新たな入試形態の導入により、高等学校や大学入学後の外国語教育に与える影響を探るため、以下の 2 つの発表を行い、その後フロアとの議論を通して「大学入試と外国語教育」について考える場を提供したい。

1) 「SFC の多言語入試と言語教育」

平高史也・藁谷郁美・白井宏美 (慶應義塾大学総合政策学部)

2016 年度入試より慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス (SFC) の総合政策学部と環境情報学部で、一般入試科目の外国語の一部にドイツ語とフランス語が導入されることになった経緯やねらい等を紹介し、今後の大学のドイツ語入試の可能性をさぐる。入学試験は大学の教育の理念やカリキュラム等と密接に結びついている。したがって、入試について論じることは入学後の教育について考えることを意味する。発表ではそうした視点に立ち、入試制度の果たす役割を通して、大学における外国語教育が担う課題や複言語教育・多言語教育の意味を問い直す。

2) 「上智大学の TEAP 利用型入試と言語教育研究センターの英語教育」

藤田保 (上智大学言語教育研究センター・副センター長)

上智大学で数年前から試験的に導入し、2016 年度の本格導入に多くの大学が参加する 4 技能測定 TEAP (Test of English for Academic Purposes) の特徴と開

発の経緯を紹介する。上智大学の言語教育研究センターの英語教育を例に、TEAP 4 技能測定により入学時に求められる英語力がどのように変わり、入学 1 年後の TEAP による進捗度テストの結果がどのようにカリキュラム改訂に反映されているかを報告する。TEAP を通して「大学教育レベルにふさわしい英語力を測ること」とは何か、TEAP 導入により今後の高等学校や大学の英語教育にどのような影響を及ぼすかについて考える。

ポスター発表 (13:00~14:30) G 会場 (2 階セミナースペース)

(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

Phonetische Bewusstheit und Bewusstmachung im Deutsch-als-Fremdsprache-Unterricht. Ein didaktisch-methodisches Konzept

David Fujisawa

Die für den Fremdsprachenerwerb äußerst wichtige Lautlehre bleibt im Deutsch-als-Fremdsprache-Unterricht weiterhin zu wenig berücksichtigt. Doch gerade auf der Ebene der mündlichen Kommunikation stellt die phonologische und phonetische Kompetenz die Voraussetzung für Sprachperzeption und Sprachproduktion dar. Darauf aufbauend können die beiden primären Sprachfertigkeiten Sprechen und Hören gezielt geschult werden. Genau hier liegt die Aufgabe der Lehrkraft, die im Unterricht immer auch als Phonetiker/-in auftritt. Um die Lernenden auf Fehler aufmerksam zu machen, stehen der Lehrkraft verschiedene hörverständnis- und ausspracheverbessernde Hilfsmittel zur Verfügung. Hierzu zählen traditionell Wiederholung, Imitation oder phonologisch-systemische Regeln, wie die Laut-Buchstaben-Beziehungen. Doch welche Möglichkeiten den Fehler zu beschreiben und Hinweise für eine korrekte Wahrnehmung und Realisierung zu liefern, stehen noch zur Verfügung? An dieser Stelle soll das Konzept der phonetischen Bewusstheit und Bewusstmachung zum Tragen kommen. Um noch tiefer in dieses Konzept eintauchen zu können, wird sich weiteren Fragen gewidmet:

Welchen Effekt hat die phonetische Bewusstheit auf Sprachperzeption und Sprachproduktion? Wie sollen phonetisch-bewusstmachende Maßnahmen erfolgen und wie können diese in Lehrwerke integriert werden?

Die Posterpräsentation, die das Konzept der phonetischen Bewusstheit und Bewusstmachung genauer vorstellen wird, soll mit der Beantwortung dieser Fragen zu anregenden und bereichernden Diskussionen führen.

だじゃれで覚えるドイツ語文法: イメージと笑いの機能を利用して

山崎 明日香

本発表は、日本におけるドイツ語教授法において従来まで考慮されてこなかった、だじゃれを導入したドイツ語文法の教授成果とその言語ストラテジーを報告する。だじゃれや洒落の言語研究の成果は、英語圏で顕著に見られる (Muschard 1999; Yus 2008; 東森 2011)。だじゃれには社会文化的な高い価値が見出されており (Wales 1989; Carter 2004; 松井 2007), そのコミュニケーション効果や訴求効果により、広告業界で言語戦略として導入されている。本実験では、

各文法事項を音声類似的な集合イメージ (Nora 1984-1992; Ricoeur 2000; Didi-Huberman 2002; Nancy 2003) に接続し、物語的また建築的な意味関連を創造するだけではなく、この言語芸術に内包する笑いの文化的機能 (Smadja 2011; 井上 2004) を利用することで、未知の外国語の文法体系を既知の群像へと変換し、学習者の文法事項に対する感情移入を促進し、容易な文法プログラミングを実現した。

本実験のアンケート調査によると、大多数がだじゃれを導入した授業 (暗記効果、雰囲気など) を肯定的に評価した。だがその反面、新しい言語の初期文法学習段階において、一つ概念にダブル・ミーニング/イメージを導入することで、学習者の認識のゆがみが解消されない恐れがある。母語話者の自然な学習過程とは異なり、言語芸術を利用した文法学習が、一時的な補助輪として利用される可能性を探りたい。ポスター発表の場では、言葉遊びを用いた文法事項の覚え方を説明し、会員と意見交換を行う。

PASCH 校生によるドイツ語新聞 JAPAN HEUTE の制作

—13 号発行に至るまでの 4 年間の試み

柴田 育子・Katrin Endres・能登 慶和

日本の PASCH 校が制作するドイツ語新聞 *JAPAN HEUTE* は、2011 年 9 月に創刊され、2015 年 12 月までの 4 年間で 13 号の新聞を発行してきた。PASCH 校新聞は、国際的なドイツ語新聞ネットワーク PASCH-Global (<http://blog.pasch-net.de/pasch-global/>) を通じて世界中に発信されることに、その大きな特徴がある。このネットワークを通じて、日本の PASCH 校とセルビアの PASCH 校との交流が開始するなど、日本においてもドイツ語学習者のネットワーク拡大の事例が見られた。また、「ドイツ語表現力向上のためのアクティヴ・ラーニング」の場としてもドイツ語新聞制作は、興味深い活動であると言える。

本発表者 3 名は、ドイツ語新聞の制作に関わっている編集メンバーであるが、「A1, A2 レベルのドイツ語学習者」がドイツ語で新聞記事を書くことについて、さまざまな疑問点や問題点を抱えている。ドイツ語で文章を書くこと・ドイツ語表現力を向上させる効果的な方法について、訪問者と多くのディスカッションを行いたい。

※ 「PASCH :学校 :未来を拓くパートナー」とは、ドイツ語学習校のネットワークを世界中に構築し、ドイツ語学習者にドイツ語やドイツ社会に対する関心と呼び起こすことを目的とする、2008 年に開始したドイツ外務省によるイニシアティブである。その実質的な運営はゲーテ・インスティトゥートが担っている。日本の PASCH 校は、加盟順に、国立木更津工業高等専門学校、獨協中学・高等学校、早稲田大学高等学院、東京都立北園高等学校の 4 校である。

Sprachlernspiele – ein Unterrichtsmittel mit hohem pädagogischem Potenzial – „Warum wir spielen“

Marco Schulze

In der Poster-Präsentation möchte ich, auf den Inhalt meiner vorangegangenen Präsentationen aufbauend, meine Forschungsfortschritte zum obigen Thema vorstellen und diskutieren. Dabei beschäftige ich mich mit der Frage, ob unser lebenslanges Bedürfnis „zu spielen“ in unserer evolutionären Entwicklung nicht eine bestimmte Aufgabe zu erfüllen hat. Grundlage meiner These ist, dass in unseren Genen und somit im Aufbau und der Wirkungsweise des Körpers die Ursachen für das Bedürfnis „zu spielen“ zu suchen sind. Es sind die biochemischen Vorgänge in unserem Körper und ihre Wirkungen auf unser Schmerz- und Lustempfinden, aufgrund derer wir reflex-, trieb- bzw. instinkthaft bestimmten Handlungsmustern folgen. Ausgehend von den monothematischen Theorien zum Thema Spiel aus dem 19. Jahrhundert (J. Schaller, M. Lazarus, H. Spencer, G. S. Hall, H. A. Carr, K. Gross) bis hin zu den neusten Erkenntnissen aus verschiedenen Wissenschaftsbereichen, die sich mit der Verhaltensbiologie beschäftigen, stelle ich, mittels einer grafischen Übersicht die Struktur und Wirkungsweisen der Leistungsparameter des Menschen sowie den Einfluss von biochemischen Botenstoffen auf unser Verhalten dar. Mit den Erkenntnissen über diese Zusammenhänge versuche ich letztendlich die Richtigkeit verschiedener Aspekte meiner Definition zur Tätigkeit „Spielen“ zu untermauern.

シンポジウム II (10:00~13:00) A 会場(207 教室)

Autofiktion heute — Zur literarischen Konstitution des autobiographischen Subjekts in der deutschen Gegenwartsliteratur

Moderator: Leopold Schlöndorff

Das vorliegende Symposium beschäftigt sich mit dem literarischen Konzept der Autofiktion, das nach der postmodernen Neubestimmung des Autors die Methoden der schriftstellerischen Selbstthematisierung aktualisiert. Der Begriff der Autofiktion geht historisch auf Serge Doubrovsky (*Fils*, 1977) zurück bzw. verdankt seine theoretische Bestimmung nicht unwesentlich Paul de Man (*Autobiographie und Maskenspiel*, 1977). Es handelt sich um einen Begriff, der nur im Kontext seiner zeitgenössischen Debatten zu verstehen ist, insbesondere in Bezug auf den viel zitierten „Tod des Autors“ (*Der Tod des Autors*, Roland Barthes 1967) und die Brüchigkeit des von Lejeune formulierten „autobiographischen Pakts von Identität zwischen dem Autor, dem Erzähler und dem Protagonisten“ (*Der autobiographische Pakt*, Lejeune 1975). Trotz dieser augenscheinlichen Zeitabhängigkeit wird die Autofiktion von der Literaturwissenschaft zu einem epochenübergreifenden Konzept erhoben, das zur Analyse autobiographischer Modelle bis hin zu Goethes Verwendung findet (*Auto(r)fiktion*, Wagner-Egelhaaf 2013). Im Gegensatz dazu liegt der gegenständliche Ansatz in einer Nutzbarmachung des Begriffs für dezidiert zeitgenössische Texte, also solche, die der Begriffsgenese historisch nachgelagert sind und damit bereits an jenem Diskurs partizipieren, der die betreffende Theoriedebatte beinhaltet.

Es soll dabei im vorliegenden Projekt nicht primär die Frage nach dem Autor selbst gestellt werden, diese Debatte scheint bereits ausreichend diskutiert. Vielmehr geht es um die Frage, warum zu einem bestimmten Zeitpunkt die Frage nach dem Autor gestellt und mit Hilfe des Konzepts der *Autofiktionalität* auf eine neue Ebene gestellt wird. Dieser Fragekomplex kann freilich nicht ausschließlich auf der Textebene behandelt werden, sondern bedarf einer Reflexion des Literaturdiskurses, in dem dieser Vorgang der Selbstfiktionalisierung des Autoren-Ichs denkbar und notwendig wird.

Zunächst muss dazu das theoretische Fundament dieses durchaus heterogenen Begriffs, der „ganz unterschiedliche ‚Mischungszustände‘ zwischen ‚Fiktion‘ und ‚Autobiographie‘“ (*Auto(r)fiktion*, Wagner-Egelhaaf 2013) beinhaltet, bestimmt werden. Es ist zu zeigen, dass es sich nicht bloß um eine eindimensionale Transformation von Fakten in

eine narrative Fiktion handelt, sondern dass auch die gegenläufige Bewegung, das ständige „Hereinbrechen der Wirklichkeit in die Spiele der Fiktion“ (*Nah am Text*, Doubrovsky 1993), Teil des autofiktionalen Ansatzes ist. Die entworfenen Theoriekomplexe werden anschließend am empirischen Material überprüft. Wesentliche Aspekte sind hierbei das Verhältnis von Faktizität und Authentizität, die Medialisierung von Texten, Genderfragen in Bezug auf das literarische Ich und schließlich die Funktion der Autofiktionalität im Literaturdiskurs.

1. Dekonstruktion und Autofiktion. Über Paul de Mans Theorie zur Autobiographie

Kentaro Kawashima

Paul de Mans Versuch, den Begriff der Autobiographie zu dekonstruieren, lässt sich vor dem Hintergrund der Problematik der Autofiktion explizieren. De Man geht in seinem Aufsatz *Autobiographie als Maskenspiel* (1979) von der Annahme einer grundsätzlichen Ununterscheidbarkeit von Autobiographie und Fiktion aus. De Mans Autobiographie-Aufsatz und Serge Doubrovskys autofiktionaler Text *Fils* (1977) stehen einander also nicht nur zeitlich nahe. Es gibt inhaltlich eine markante Gemeinsamkeit zwischen de Mans dekonstruktiver Theorie zur Autobiographie und der literarischen Praxis der Autofiktion. Freilich führt de Man die Ununterscheidbarkeit von Autobiographie und Fiktion nicht auf das Unbewusste des Verfassers zurück, sondern auf eine rhetorische Verfasstheit eines Textes, womit er sich deutlich von Doubrovsky abgrenzt. Wie schon der Titel des Aufsatzes ausdrücklich ankündigt, begreift de Man die Autobiographie weder als eine Gattung noch als eine Textsorte, sondern als Effekt aus einem rhetorischen Spiel der Figuren: Die Prosopopöie (etymologisch: eine Maske oder ein Gesicht geben) ist, so de Man, die Trope der Autobiographie. Das heißt, dass der Autobiographie ein rhetorisch-fiktionales „Maskenspiel“ zugrunde liegt, das die Figur der Prosopopöie in Gang setzt. De Mans Theorie impliziert also gleichsam ein anderes Argument für die Autofiktionalisierung als Doubrovsky.

2. „Autobiographie – Ich war nie ein guter Genosse“ – Zum Wechselspiel von Faktizität und Authentizität in der Autobiographie „Tumult“ (2014) von Hans Magnus Enzensberger

Jin Yang

Die im Jahr 2014 veröffentlichte Autobiographie *Tumult* des Büchnerpreisträgers Hans

Magnus Enzensberger wirft die zentrale Frage auf, welcher Spielraum einem Schriftsteller, der zutiefst skeptisch hinsichtlich der Verlässlichkeit des Gedächtnisses, der Erinnerung sowie der aktiven Vergegenwärtigung vergangener Ereignisse ist, überhaupt noch zu Gebote steht, um auf der Grundlage eines privaten Lebensausschnitts eine tumultöse Zeitgeschichte einzufangen. Im gegenständlichen Vortrag möchte ich textanalytisch offenlegen, dass Enzensberger hier als postmoderner Schriftsteller bzw. Ichbiograph dazu tendiert, jeweils zwischen den Extremen dokumentarischer Schreibtechniken zu changieren: zwischen dem Festhalten verifizierbarer Fakten auf der Basis von Wahrhaftigkeit garantierenden schriftlichen Dokumenten zum einen und der zelebrierten Inszenierung einer Gesprächssimulation als Akt des Erinnerns auf der anderen. Dabei entsteht eine vorwiegend hybride autobiographische Textform mit häufigen Anleihen bei unterschiedlichen Untergattungen (Tagebuch, Autoreninterview usw.).

3. *Abfall für alle*, Rainald Goetz: Mechanismen eines (s)ich performativ generierenden *Weltkunstwerks*

Masanori Manabe

Die autofiktionale Inszenierung in einem Werk kann bei performativen Autoren wie Rainald Goetz als Verschränkungspunkt verschiedener kultureller Diskurse (Pop-Kultur, Techno-Performance-Kultur, Post-Ost-West-Konflikt-Kultur und Internet-Kultur) fungieren, wodurch eine neue Art der Beziehung zwischen dem Subjekt, der Welt sowie dem künstlerischen Produkt konstituiert wird. Mein Vortrag versucht zu erläutern, auf welchen Mechanismen basierend die Werke von Goetz entstehen und rezipiert werden, wobei meines Erachtens das angeblich „Realität“ stiftende, instrumentalisierte Szenario des autobiographischen Paktes eine zentrale Rolle spielt. Z.B.: Die „originale“ Internet-Version von *Abfall für alle*, die in einer Vorwegnahme der heute sehr beliebten (We)blog- und Social-Media-Kultur entstand, hat Goetz vom Februar 1998 bis Januar 1999 fast täglich als tagebuchartige Skizzen auf seiner Webseite veröffentlicht. Darin verarbeitete er seine aktuellen Gedanken, Gefühle, Assoziationen sowie das von ihm Gesehene, Gelesene und Gehörte. Im selben Jahr (1999) wurde das gleichnamige Buch dann mit dem genrebestimmenden Untertitel *Roman eines Jahres* publiziert, das einen teilweise redigierten, aber inhaltlich hinsichtlich der Internet-Vorlage nahezu identischen Text umfasst. Durch die Analyse dieses Produktionsvorganges sowie des Werkes selbst wird ersichtlich, wie ein literarisches Kunstwerk im Internetzeitalter mit den performativen „Ich-Welt-Werk“-Schemata die herkömmliche konstative „Ich-Welt“-Perspektive sprengen kann.

4. „Von Geschichte hatte sie keine Ahnung, alles löste sich in Geschichten auf“. Zu Felicitas Hoppes autofiktionalem Roman *Hoppe*

Hiroshi Yamamoto

Ende der 1960er Jahre, also zu einem Zeitpunkt, an dem „der Tod des Autors“ (R. Barthes) bereits vielfach verkündet worden war, begannen sich Frauen allmählich einen Autorenstatus zu erkämpfen. In Frankreich wurden etwa in Simone de Beauvoirs Memoiren die traditionellen männlichen Formen der Selbstdarstellung grundlegend in Frage gestellt. Auch in den deutschsprachigen Ländern versuchten selbstbewusste Schriftstellerinnen wie Ingeborg Bachmann (Malina, 1971) und Christa Wolf (Kindheitsmuster, 1976) die Abwesenheit der Tradition weiblicher autobiographischer Selbstdarstellung bewusst zu machen und mit der Konstruktion einer linearen, geschlossenen Geschichte zu brechen, bzw. eine neue Schreibart herauszuarbeiten, um die Realität des weiblichen Lebens adäquat zum Ausdruck zu bringen. Allerdings trat damit das Kriterium der Authentizität einerseits in den Vordergrund. In meinem Vortrag möchte ich am Beispiel des Romans „Hoppe“ zeigen, wie die Stilprinzipien Inszenierung und Parodie in der Selbstdarstellung der Frauen derzeit das alte Authentizitätsparadigma ersetzen und wie auf diese Weise die Diskontinuität und die Vervielfältigung des weiblichen autobiographischen Ichs inszeniert wird.

5. „Und wer war ich noch?“ – Funktionen der Autofiktionalisierung im literarischen Diskurs

Leopold Schlöndorff

Peter Handke verfasste in den Jahren 1989–1991 und 2012–2013 fünf essayistische Texte, die er jeweils mit der deutschen Übersetzung für Essay als *Versuch* betitelte. So heterogen die fünf *Versuche* auch sein mögen, beinhalten sie doch alle Reflexionen über das Schreiben und den Schreibenden, also über den schriftstellerischen Akt und dessen Subjekt. Es handelt sich um die Selbstbehauptung eines Autors in einem Diskurs, dessen Gegenstand er zwar ist, über den er jedoch keine Diskursivität beanspruchen kann. Das Genre des Essays bietet sich für die subjektivistische Verschränkung faktischer und fiktionaler Erzählelemente an. Interessant ist jedoch, dass die Autorengeneration nach Handke für die erzählende Selbstthematization eine andere Gattung wählt, nämlich den Roman. So etwa Thomas Glavinic und dessen Autofiktion *Das bin doch ich* (2007), die den Prozess des Schreibens am Beispiel seines ein Jahr zuvor erschienenen Romans *Die Arbeit der Nacht* (2006) darstellt und besonders auf die Rezeption des Werkes im literarischen Wien abstellt. Diese ans Narzisstische grenzende Selbstfixiertheit kann

freilich nicht ohne das Moment der Selbstironie vollzogen werden, was sich in teils hochinnovativen, teils aberwitzigen Strategien der Fiktionalisierung und „De-Plausibilisierung“ äußert.

口頭発表：文学Ⅲ（10:00～11:55）B会場(206教室)

司会：高橋 輝暁・山本 淳

1. 18-19世紀の庭園史の変遷と文学作品に描かれた庭園との関係からの Natur と Kunst の考察 —ゲーテ『親和力』, ルソー『新エロイーズ』を例に

伊東 麻衣

イギリス式風景庭園は18世紀初頭、従来の人工的なフランス式整形庭園に対し、「自然そのまま」の風景を庭園内に取り入れようとする動きに端を発する。フランスに風景庭園が広まる起因となったルソーの『新エロイーズ』（1761）の庭園は、一見「自然そのもの」に見えるが、全ては造園主ジュリーの指導による。当時の芸術論の大著であるカントの『判断力批判』（1790）では「芸術は、我々が確かにこれを人工と知っているにも拘わらず自然と見なされ得ねばならない」と述べられ、造園術を、ある種の理念に沿って自然の構成物で大地を飾ることだと定義づけている。本発表では、『新エロイーズ』の庭園は、カントの先取りであると位置づけ、それがゲーテでは『親和力』での造園活動として現れると考察する。ドイツでは1770-80年代に「感傷庭園」と呼ばれる風景庭園が大流行するが、その後造園術の流行は下火となる。ゲーテの『親和力』（1809）は造園の全盛期が過ぎ行く中で書かれたにも拘らず、作中で登場人物達は風景庭園を思わせる庭園の造園活動に携わる。造園の「自然」とは、人工があつてこそ成立するにも拘らず、カントはそこに「人工」を感じさせてはならないと述べた。ゲーテはカントが「観照における構想力の自由な遊び」と説明した造園の理念を踏まえ、模倣芸術という当時の造園術の行き詰まりに対し、「構想力の自由な遊び」という人工の営み、造園における人間の活動の意義を示したのであった。

2. 末期の視力 —E. T. A. ホフマン『従兄の隅窓』—

清水 恒志

『従兄の隅窓』（1821）はE. T. A. ホフマン最晩年の小説である。この小説については、ベンヤミンの都市文学としての言及をはじめとして、現在では観相学や出版文化といった文化史的視点や、あるいはメディア論、知覚論的視点から非常に多様な議論がなされている。

本発表はそうした研究を踏まえながら、小説の構造と文体に焦点を据える。それによって、主人公である小説家の「従兄」が病によってもはや作品を物しえなにもかかわらず、なお理想の小説家像として描かれていることを、それ以前のホフマン作品における芸術家像と、舞台であるベルリンに関する表現を手掛かりに論証したい。

『砂男』のナタナエルや、『アーサー王宮』のベルクリンガーなど、ホフマン作品の芸術家たちはしばしば社会の調和の破壊者として現れた。しかし「従兄」は彼らと共通点を持ちながら、むしろ市民社会を創作の源泉とする大衆的な作家として、それまでの孤独な芸術家像と一線を画す。

ベルリンの多様な色彩の描写や、「カンガルー」、「ベーリング海峡」といった様々な地域をイメージさせる比喩は「世界」都市ベルリンの中心に住む「従兄」が「世界市民」として高い視点から現実の視力では見ることのできない人々の姿を見ていることを示している。

この小説は対話の文体を持ち、一人称の語り手である「私」は芸術を解さない者として、「従兄」に対置されている。それは『従兄の隅窓』が、賢者が若者を導く対話篇として構想されているからである。

本発表は『従兄の隅窓』の作品としての構想を再度確認することで、ホフマンの文学観を明らかにする試みである。

3. シュテファン・ツヴァイクの短編

『ある職業を思いがけず知ったこと』に見る大都市と人間

杉山 有紀子

シュテファン・ツヴァイクがロンドン亡命の前後に書いた短編『ある職業を思いがけず知ったこと』 *Unvermutete Bekanntschaft mit einem Handwerk* (1934)に描き出された大都市のいくつかの側面を、特に語り手の体験を通して明らかにすることを目指す。作中の都市にまつわる様々なモチーフに関連して、ベンヤミンのボードレール論、及びそこで言及されるボードレール及びE. A. ポーの作品が参照される。物語はパリを訪れた語り手の「私」が群衆の中に一人の掏摸を発見して後を追っていくという内容で、ポーの『群衆の人』と共通する構図を持つ一種の不完全な探偵小説とみなし得る。ただ掏摸とそれを尾行する語り手は単なる犯罪者と追跡者という枠を超え、共に「群衆」「遊歩」「匿名性」「私空間の消滅」等、大都市と密接に結び付いた諸要素に深く関与していく。その過程では遊歩を通じた既存の認識の解体と、新たな価値としての再構築も観察できる。この機能を体現するところのボードレールにおける「屑屋」、すなわち生産／消費に中心化されたシステムの外に立つ反社会的存在が、ツヴァイクにおいては掏摸として現れるが、後者は犠牲者としての性質をより強く持つ。掏摸は群衆の匿名性による庇護を必要としつつ、同時に群衆の監視によって絶えず脅かされている。語り手による掏摸への共感、ナチス政権成立に伴う故郷喪失に直面する中で作者の抱いていた、社会への確かな帰属を持たない亡命者という不安な運命への予感を反映している。

口頭発表：文学Ⅳ／文化・社会（10:00～12:35）C会場(408教室)

司会：古田 善文・工藤 達也

1. 保守革命の「文書」共同体について

—ホフマンスタールとE・ユンガーにおける「探求者」と「大衆」の統一に対するまなざしを手がかりに

稲葉 瑛志

保守革命は戦間期に、反ヴェルサイユ・反自由主義・反民主主義を掲げ、市民社会に抗する共同体を求めた。このラディカルな主張には、安定した基盤が崩壊しつつある精神状況に直面した大衆の反応に対する右派知識人の応答が確認できる。

本発表は保守革命論者ホフマンスタールとE・ユンガーの求めた共同体像を、言語を媒介とした「探求者 (Suchende)」と「大衆 (Masse)」との想像上の結びつきという観点から明らかにする。

ホフマンスタールは講演『国民の精神空間としての文書』(1927)において、ドイツにおける共同体形成の困難の原因を教養人と非教養人との間の共通言語の不在という「不幸な亀裂」にみた。彼はこの亀裂を言語創造により克服する存在「探求者」をしめした。本発表は、「探求者」が具体的人物というよりむしろ不特定多数の存在として呼びかけられていることに着目し、その内実をヴァイマル中期以降に特殊な「集合化／流動化」する政治・文化状況から考察する。そこから大衆に敵対すると同時に関心をいさぐ新型の知識人像を、同時代の貴族主義的大衆批判の言説とつきあわせて浮きぼりにする。次に、ユンガーのエッセイ『冒険心 第一稿』(1929)において、ホフマンスタールの共同体思想が色濃く反映された思考法を抽出し、「探求者」像が次世代の保守革命論者によってどのように展開されたのかについて検討する。前衛的文学表現が散りばめられたこのテキストには、読み書きのできる新中間層に対する期待と不安の両義性がうっしだされている。この両義的な心性がユンガーの共同体構想にどのような影をおとしているのかについて、テキストにおける「驚愕」「ショック」という文学モチーフの政治的作用を論じることによって明らかにする。

2. 現代における古典の上演傾向 —シラーの『たくらみと恋』を例として

丸山 達也

上演レパートリーに古典作品が常にある程度の割合で含まれるドイツ語圏の演劇においては、依然として古典に一定の価値が置かれている一方で、特に60年代以降に主流となった演出スタイルを通じて、逆に古典の価値がその都度問

い直されているように思われる。そこでは演出ごとに全く異なる表現方法や作品に対するアプローチが取られており、現代において古典の上演は、演出家を中心として、従来の文学的作品解釈に必ずしも基づかない、作品に新たな視点・解釈が与えられる場となっているのである。

本発表では、こうした演劇実践において最も頻繁に取り上げられる作家の一人であるシラーの作品の中でも、最多演出数を数える『たくらみと恋』を例として、1959/60年シーズン以降の演出の中から重要なものを選出する形で、その上演史を概観する。先行研究（Piedmont, 2005）では、劇評に基づく受け手の視点が中心であるのに対し、ここでは台本や上演プログラム等の上演資料を用いて制作者側の意図・視点も反映することで、より総合的な観点からの分析を試みる。その上で、『たくらみと恋』がこれまで実に多様な形で舞台化されてきた一方で、作品に内在する政治的・社会批判的な要素よりも、登場人物たちの内面の描出の方に、より演出家たちの目が向けられる傾向があること、いわゆるメロドラマ的な性格が強いという共通点が見られることを指摘したい。

3. ドイツにおけるヴァンパイア受容 —1820年代の仏独演劇・オペラ台本を中心に

森口 大地

英国詩人バイロン卿の侍医であるジョン・ポリドリの小説『ヴァンパイア (The Vampire)』（1819）は瞬く間にヨーロッパを席卷し、ヴァンパイア文学における転換点の一つとなった。その後を追うようにしてフランスでは多くのヴァンパイア演劇が誕生したが、特にシャルル・ノディエの『ヴァンパイア (Le Vampire)』（1820）は絶大な人気を博した。ジェームズ・プランシェによるイギリス向けの改作も成功を収め、ドイツではハインリヒ・リッターが1821年に翻案している。これはマルシュナーのロマン主義オペラ『ヴァンパイア (Der Vampyr)』（1828）の原型となり、その陰に隠れるようにリントポイントナーの『ヴァンパイア (Der Vampyr)』（1828）が存在する。

1820年代のヴァンパイア演劇・オペラ研究は、その作品数ゆえに多くがフランスに集中している。たとえばフレデリック・バーウィックは作用美学を考慮しつつプランシェやノディエについて論じ、マリオン・リンハルトは主にノディエに言及しながら、当時の作品がヴァンパイアにバイロン卿を見る傾向を取り上げている。実際、研究では、ポリド리는ルスヴン卿（ヴァンパイア）にバイロン卿を投影していたとされている。ここで留意すべきは、リントポイントナーのオペラではポリドリ自身の投影であるオーブリがヴァンパイア化している点である。本発表ではこの奇妙なずれに注目しつつ、ドイツのヴァンパイア受容について論じる。

4. Das Konzept der Theaterschule in den deutschsprachigen Ländern in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts

Asuka Yamazaki

Während der ersten Hälfte des neunzehnten Jahrhunderts intensivierte das Theater in den deutschsprachigen Ländern seine Funktion als moralische sowie erzieherische Anstalt in der bürgerlichen Gesellschaft immer weiter und trug zur Stärkung der nationalen Identität des deutschen Volkes bei. Ebenfalls wurde die Rolle des Schauspielers in der nationalen Aufklärung intensiviert. Das Referat beschäftigt sich mit dem Konzept der Schauspielschule von einflussreichen Personen wie Edward Devrient (1840), Karl Gutzkow (1846) und Heinrich Theodor Röscher (1848). Nicht nur im Blick auf die zeitgenössischen künstlerischen Diskussionen, sondern auch auf die neue Bildungspolitik sowie das Bildungssystem in Deutschland, werden die Idee und Funktion der Schauspielschule im Fokus auf die neue Vorstellung über die Schauspieler untersucht, die allmählich durch das akademische System ausgebildet und ein ideales Modell für die Nation wurden.

Das Konzept der Theaterschule wurde bisher besonders im Zusammenhang mit dem Bildungskonzept für Schauspieler sowie der nationalistischen Bewegung der Theaterreform betrachtet. Im Hintergrund des neuen Bildungsplans für Schauspieler lässt sich sowohl die neuhumanistische und aufklärerische Bildungsidee für die Nationalerziehung sowie das darauffolgende nationale Bildungswesen berücksichtigen. Die Veränderung des Schauspielerbilds, das im Konzept der Theaterschule als ideale Person gezeigt wurde, lässt sich im Bezug auf die Entwicklung der Schauspielkunst sowie die neue Vorredekunst im Bezug auf den zeitgenössischen Sprachnationalismus analysieren.

口頭発表： 語学（10:00～12:35） D 会場(409 教室)

司会：Angelika Werner・黒子 葉子

1. スイスドイツ語における存在表現の日常的使用

大喜 祐太

本研究の対象は、スイスドイツ語の動詞 *ha* (*haben*) を用いた非人称表現「*es hat* 構文」(e.g. *Ufem Tisch häts viil Buecher. lit. Auf dem Tisch hat es viele Bücher. Hd. Auf dem Tisch liegen viele Bücher.*) である。Ammon *et al.* (2004) によれば、*es hat* 構文は、「～にある」(*vorhanden sein*) の意味を持ち、オーストリア西部・スイス・ドイツ南西部に分布し、*es gibt* 構文との類似性が示唆されている。「ドイツ日常言語地図」では、Eichhoff (1978) の資料を集約し、非人称存在表現における *geben* / *haben* / *sein* の方言的区分を認めている。本研究では、ドイツ語圏スイスでの存在表現使用の考察のために、スイス SMS コーパスの用例分析と母語話者へのアンケート調査を行った。その際、多様な日常的言語使用を想定することによって、*es hat* と *es gibt* は単なる形式的な言い換え表現ではなく、両者には明確な語用論的差異があることを観察できた。大別して「*es hat* のみを許容」「*es gibt* のみを許容」「両構文を許容」に分類でき、主な特徴として、*es hat* には所在規定、他方、*es gibt* には存在規定・提供の可否が挙げられる。特に両構文を許容する用例を観察すると、母語話者は各構文に対して異なるコンテキストを念頭に置いて容認度を判断していることを確認できた。

本発表の目的は、方言的な表現として扱われる *es hat* の理解を再考し、*es gibt* と *es hat* の根本的な用法上の相違を提示することにある。本研究は、ドイツ語存在表現の包括的研究を補完する個別的研究として位置付けられ、それゆえ、ドイツ語圏全体の存在表現使用の実態を把握することを今後の課題とする。

2. 類縁形式との比較を通して見たドイツ語未来形 *werden* + 不定詞の歴史的発展

嶋崎 啓

ドイツ語の未来形 *werden* + 不定詞は初期新高ドイツ語期に文法化されるが、その成立過程で統語的もしくは意味的に類縁する様々な形式が並存していた。そのうち類縁性が高いと思われる *werden* + 現在分詞は中高ドイツ語期から 15 世紀前半まである程度の頻度で現れるが、十分には発達しないまま衰退し、それが *werden* + 不定詞の成立に与えた影響は明らかでない。影響という点ではむしろ、中高ドイツ語で頻出する *beginnen* + 不定詞が重要であろう。繫辞動詞の *werden* は形容詞的な現在分詞と結びつくのが自然でありながら不定詞と結びついたことも *beginnen* + 不定詞からの類推として説明できる。ただし先行研究では、

beginnen が開始相を表すため、**werden**＋不定詞も開始相というアスペクトから未来形という時制へ移行したと論じられることが多いが、本発表では、中高ドイツ語の **beginnen**＋不定詞の多くは **beginnen** が直説法過去であり、それは必ずしも開始を表さず、また、その不定詞はしばしば「泣く」のような意志によらない動作を表すことに注目したい。その特徴は初期新高ドイツ語の〈**werden** の直説法過去〉＋不定詞の特徴と一致し、そこで表されるのは開始というよりはむしろ非意志的な「自発」である。この「自発」の意味が〈**werden** の直説法現在〉＋不定詞の未来形としての意味の確立を促したと考えられる。

3. 不変化詞動詞における「余剰句」の生起とその解釈について

和田 資康

当発表では「余剰句」(*Pleonastische Direktionale*, Olsen 1996) と呼ばれるドイツ語不変化詞動詞における方向規定句の生起について考察する。

まずこれらの前置詞句が上記の表現によって扱われた背景として、不変化詞動詞、つまり「不変化詞＋基礎動詞」の形式が「前置詞句＋動詞」の形式との対応関係において説明されていたことが指摘される。

1) Er fährt seinen Jeep durch das überschwemmte Gelände. > Er fährt seinen Jeep durch.

すなわち、これらの説明においては、不変化詞の存在によって前置詞句（方向規定句）に相当する項が既に満たされていると解釈されるため、上記の句の生起は余剰的なものとして、あるいは動詞述部を修飾する要素としてのみ理解されるのである。

2) Er fährt seinen Jeep *durch das überschwemmte Gelände* durch.

しかしながらこれらの説明に対しては、いくつかの疑問が生じる。当発表では、以下の例で示すような、当該の句が高い頻度で生起する事例に着目することにより、それらの解釈を問う手がかりとする。

3) Das Gewerbegebiet soll *an die Autobahn* angebunden werden.

これらの現象が見られる動詞の特徴としては、a) 基礎動詞が「移動」の性質を持つこと、また b) 方向規定句の内容が文意味において自明であることが挙げられる。また表面的には「移動」の意味を持つそれらの動詞述部が、一種の「行為」として認識されている可能性についても言及する。加えてコーパスの用例から

は、文脈的要因が句の生起にどのように影響するかを指摘しつつ、それらの句の新たな位置づけを試みたい。

Literatur:

Olsen, Susan (1996): Pleonastische Direktionale. In: Gisela Harras/Manfred Bierwisch (Hg.): Wenn die Semantik arbeitet: Klaus Baumgärtner zum 65. Geburtstag. Tübingen: Niemeyer, S. 303-329.

4. 嗜好述語, 接続法 I 式, 直示表現

高 裕輔

本発表では, *fun, tasty* といった個人的嗜好述語 (predicates of personal taste. 以下, 嗜好述語) とドイツ語における接続法 I 式による間接話法 (以下, KI) の解釈における平行性を論じ, この議論の下で, KI の直示的性質を捉え直すことにより, KI の解釈が形式的に与えられることを示す。さらにこの枠組みにより嗜好述語, KI および直示表現の解釈が統一的に表現されることを主張したい。

Lasersohn (2005)による嗜好述語の分析を拡張した Stephenson (2007)では, 嗜好述語を持つ(1)のような文の解釈において, 嗜好の「評価者」(*Sam*)は嗜好述語の項として計算される。*fun* であるかどうかを判断するのは話者ではなく、「評価者」である。

(1) The roller coaster is fun for Sam. (Stephenson 2007: 592)

一方, KI を含む(2)の文では, 命題の真偽は話者ではなく情報の出典をあらわす *die Aussage ...* に委ねられている。

(2) Nach der Aussage des Ministerpräsidenten habe niemand

(Zifonun et al. 1997: 1765)

ここでは, 話者ではなく「評価者」によって命題の真偽が判断される嗜好述語と, 発話者が命題の真偽に対して責任を持たない KI を並行的に捉え, まず単純な形式化を試みる。

また, KI の直示的性質として言及されている *Origo-Verschiebung* (Smirnova & Diewald 2013)という性質がある。(3)においては KI で表現された補文命題の真偽を判断する主体は, 話者から *Peter* へシフトしている。

(3) Peter sagte, dass er einmal da gewesen sei. (S&D: 453)

ただし上記の単純な形式化では, (4)の容認度の違いを説明できない。

(4a)# Ich glaube, dass Maria krank sei.

(4b) Ich glaubte, dass Maria krank sei.

(von Stechow 2003: (125a) (125b))

そこで「評価者」を, 「発話者」「発話時」といった *Origo* へ拡張をすることで

解決を試みる。さらにこの拡張を通じ, *ich, jetzt* 等の直示表現の指示対象を形式的に表現できることを示す。

ブース発表 V (11:30~13:00) E 会場 (407 教室)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

Inhaltsorientierter Unterricht ohne kurstragendes Lehrwerk im Anfängerunterricht. Eine (selbst-)kritische und selbstreflexive Betrachtung durch die beteiligten muttersprachlichen Deutschlehrer

Holger Schütterle / Davide Orlando

In dieser Kabinenpräsentation stellen die Referenten ihre Erfahrungen mit einem Unterrichtskonzept im Anfängerunterricht Deutsch vor, das ohne kurstragendes Lehrwerk auskommt, auf Inhalts- und Aufgabenorientierung setzt und bis zum jetzigen Zeitpunkt schon 3 Jahre verfolgt wird.

Im Mittelpunkt des knapp 30-minütigen Vortrags steht nach der Erläuterung der „Entstehungsgeschichte“ eine tiefergehende Betrachtung dieses Unterrichtskonzepts. Dabei wird vor allem auf die Schwierigkeiten (sowie deren Lösung) eingegangen, die sich in der Zusammenarbeit aller beteiligten muttersprachlichen und japanischen Lehrenden ergeben, bedingt u. a. durch unterschiedliche Auffassungen vom Kurskonzept und deren Umsetzung. Dargestellt wird das an Beispielen gemeinsamer Absprachen bezüglich Unterrichtsinhalten, Aufgabenformen sowie Einsatz und Erstellung geeigneter Lehrmaterialien.

Der Fokus des Beitrages liegt zwar auf der Organisation und Durchführung des Kurses aus Sicht der Lehrenden. Trotzdem sollen auch die Studierenden zu Wort kommen – in Form von Produkten, die in dieser Art des Unterrichts entstanden sind.

Durch einen Meinungsaustausch mit den Anwesenden wird im zweiten Teil der Präsentation angestrebt, Möglichkeiten aufgabenorientierten Unterrichts für Studierende im ersten Studienjahr zu diskutieren, kritisch zu hinterfragen und weiterzuentwickeln.

<獨協大学 キャンパスマップ>

